

---

# **惡魔 + 私 = 魔王 ?**

櫻木 夢羽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

悪魔 + 私 = 魔王？

### 【Zコード】

Z06560

### 【作者名】

櫻木 夢羽

### 【あらすじ】

魔王を選ぶための悪魔戦争。幼少の頃戦乱の中で育ち、今は平穏な日常生活を手に入れたセレーナは戦いという非日常に引きずり込まれる。史上最強の魔王を目指す唯我独尊なロキと、平穏を望むセレーナの運命は！？バトルファンタジー「中二病作者の処女作」

## 口常に転がり込んだ非日常

世界最高峰の魔法学園、トロパイオンアカデミーに十四歳で飛び級入学。魔王の娘で、半悪魔。全属性を使いこなす天才児。

周りの人たちはいかにも私が凄いみたいに言つけど、半分悪魔でしかも魔王の娘なら魔力が強いのも、全属性使えるのも当たり前。確かに、人間から見たら凄い事かもしない。だけど、他の悪魔から見れば私は成り損ない。

人間より抜き出てるけど、悪魔には足りない。私は微妙な存在なんだ。

そんな風にマイナスの方にばかりに考えてびくびくしてたのは一年前の話で、今私は友達もそこそこできて、普通だと思える生活を送ってる。簡単に言つちやいけない言葉なんだろうけど、今私はとても幸せ。

「あー、平和だねえ」

暁色の空を見上げながらそう言つと、黒髪の親友のアヤメが黒真珠みたいな目を細めて笑う。

「セレーナつてば、年寄りみたい。何時もと同じ放課後じゃない」それに賛同するように、もう一人の親友、リコも夕日で燃えるように輝いている金色の虹彩を細める。

「セレーナが馬鹿なのは何時ものことだろ」

「あー、酷い。私一応首席ですけど?」

「何でもない毎日が好き。」

戦うたびに傷ついていく母さんも、病氣で瘦せ衰えた父さんも、殺意剥き出しの悪魔もいなくて、友達と過ごす毎日が。

「そりや、大剣片手で振り回すような奴に勝てるわけねーだろ」

私達の通うトロパイオンアカデミーは戦士育成を主体にしていて、成績は全て戦闘能力のみ。授業態度とか、ペーパーテストなんて一切ない。

明日から夏休み。

アヤメとリコと二人で楽しく過ごすつもりだ。

そんな日常が何時までも続けば良いと、続くと思っていた。

## 日常に転がり込んだ非日常？

夏休みに入つて一週間。アヤメに手伝つてもらつて宿題もほとんど終わつた。

セレーナは一人でアカデミーの敷地内の山奥に来ていた。実習用に設けられた為、殆ど人の出入りの無い場所で、一人になるには最適だ。

人気の無いのにはもう一つ理由があつて、山の頂上には魔界と繋がつた場所があり、魔物が多く出現するからだ。わざわざ近づく者もいないので、特に警備がされている訳でもなく、結界が張つてあるだけ。セレーナからしてみれば、簡単に通り抜けることができる。魔界の冷氣を感じて、セレーナは足を止めた。

魔界で過ごした日々は残虐なものだったが、それでも、彼女にとっては故郷だつた。

ぞわり、と鳥肌が立つような感覚を覚えながら、大きく息を吸う。魔界の魔力が身体中に満ちていくのと同時に、血生臭い記憶が蘇つっていく。血の匂い、煙の匂い、肉が焼ける、吐き気がするほどに甘い匂い。両親の断末魔。

不快なそれを、振り払おうとした時、びくり、と身体中の血が沸き立つのを感じた。

緊張感にも似たそれは、紛れも無い恐怖だった。恐ろしく強大な何かが、魔界から出てこようとしていた。本能的にそれを知つたセレーナは踵を返そうとした。

「動くな」

有無を言わせない響きに、動けなくなる。息さえも、躊躇つてしまふ。

これが、魔力だ。恐ろしく强大で、甘美な、人間や自分が持つているものとは違う、禍々しい力だ。圧力だけで人を操れるし、耐性がなければ死ぬことだつてある。

かさり、と草の曲がる音がして、相手がこちら側に入ってきたことが分かる。逃げなければ、と脳が警告するのに、セレーナのみに向けられる圧力が、それを許はしない。

ふつ、と魔力が弱まり、セレーナは今まで自分が息を止めていたことに気が付いた。喘ぐように息を吸い込み、立つてしようと足を踏ん張る。

同時に、横に雑ぐよひにして迫る冷氣を感じ、慌てて後ろに飛び、回避する。

すると、悪魔は満足そうな笑い声を零した。

「全盲と聞いていたが、流石は魔王の娘、気配だけで動けるか」僅かながらに、声に疲れが混じっていることに気が付き、セレーナは疑問を覚える。

「俺と契約しろ。拒否権はない。ま、拒んでもいいが、その時は首と体がお別れしてるぜ」

「け、いやく？」

相手が一步近づくを感じ、セレーナも、距離を取ろうとするが、手首を掴まれた。引き寄せられるのを感じ、なんとか手を振り払おうとする。

「そ、契約だ。悪魔戦争、って言えば分かるよなあ？」

ぞくり、と肌が粟立つのを感じ、吐き気が襲つてくる。血の臭い、悲鳴、赤、紅、朱、血の色。それに染まった、両親。

「お前の両親が殺された戦いだ。それに俺の契約者として参加するんだ」

くつくづく、と低い笑い声が響く。意地の悪いその笑いに、セレーナは手を振り払い、勢い良く離れる。

「黙れ！誰がそんなものに参加するか！」

そう怒鳴った途端、痛みと、衝撃を感じた。どうやら、木か何かに叩きつけられたらしい。

「断つたら殺すと言つた。そんなに死にたいのか？」

殺すなら殺せ、と言いかけて口を噤んだ。

一年前の自分なら簡単にそう言っていた。今、それを止めているのは、二人の親友の存在だ。二人の声が、頭の中で何度もセレーナを呼ぶ。

「うつ、殺し合いの日々なんでもう嫌だ。私は普通に生きたい」涙ながらにそう言うと、溜め息と共に解放された。

「ま、いい。少し時間をやる。考えろ」

そして、予想以上に優しく頭を撫でられた。骨ばった大きな手が、昔の父を思い出させたのか、セレーナはゆっくりと意識を手放した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0656o/>

---

悪魔 + 私 = 魔王？

2010年11月21日16時27分発行